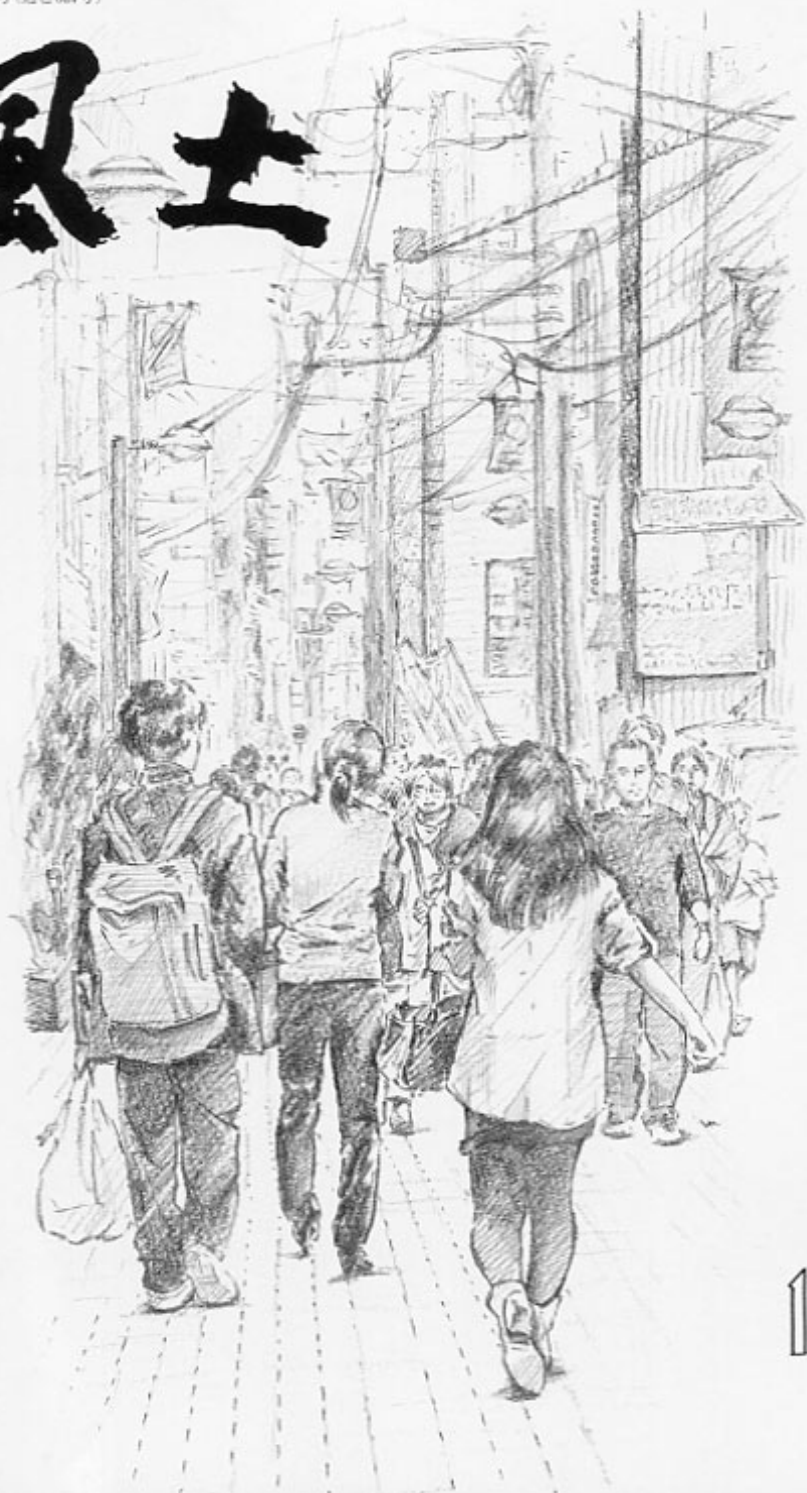


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻10月号(通巻627号)

風土

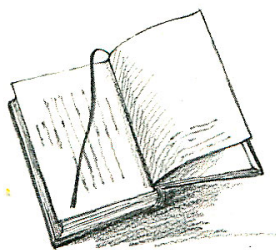


10

酔芙蓉
神蔵器

なかんづく桂郎の句の扇子かな
書き写す過去帳五代いなびかり
立てかけしままの梯子や盆の月
くるぶしに盆の過ぎたる風の吹く
八十の肩を平らに酔芙蓉

権僧正案内の月山とんぼかな
三尺のわらべも師とす立葵
秋立つや寄らず離れず石二つ
八月や貝にはなれぬ雀つこ
盆の来る明珍火箸音に出て
行く雲としばらくあそぶ墓参り
施餓鬼会の一人高音に鉦叩く



竹間集

同人作品



「淡交」以後(三十四)

野沢しの武

温泉壺より出たる裸に山笑ふ
啄木の三倍生きて啄木忌
母逝きて六昔母と見る桜
さくら樹下空ラの柩の運ばるる
工事場に無人の重機夕桜
惜春や死亡広告切り抜きて
亡き数に一人加ふる木の芽冷

巴里祭

鈴木石花

青信号待つ交差点日の盛り
ボランテイアのバス被災地へ雲の峰
巴里祭や客間に飾る画の卵
カサブランカ五尺上より香を放つ
本山の門前通り一夜酒
問屋より朝顔市の団十郎
町ごとの山車それぞれに彫深し

はんざき

山路紀子

片白草翻りつつひるがへる
木道の下の水音炎暑かな
土竜穴大緑陰の下に尽く
はんざきの動くを待ちて動けざる
洞を出て山椒魚の目の赤き
階の竹の手すりの灼けに灼け
七月の机上に六法全書かな

空海の山 岩木 茂

空海と空をひとつに夏木立
老鶯や御廟の杉は天に入る
ほつほつと笹百合明り御廟みち
大門より高野の涼を纏ひたる
空海の山の梵字の涼しかり
星月夜天水桶は水溜めて
空海の山の蚯蚓に鳴かれけり

薄雪草 相沢有理子

薄雪草そよぐ高原大気澄む
くちざさむエーデルワイス避暑の荘
子と語る夕べや南蛮漬けの鮎
山車を曳く馴染みの牧夫音頭取り
ペランダに日がな忙しき塗装工
幾日もペンキの匂ひ酷暑来ぬ
足場解く音に紛るる蟬しぐれ

ひぐらし 小林輝子

青胡桃小指がほどに栗鼠の森
薔薇垣にかの日の少女老ゆ訪へり
天水を貯ふ沙羅の落花かな
したたりの音の集まる樺林
合歓咲くや風の添ひくる喪服の背
胸のもの少し離して合歓に佇つ
ひぐらしの夕の輪唱十方へ

麦熟れ星 小野寺節子

雲分けて誰を探すの麦熟れ星
清貧の松の根方に蟬の穴
サングラス伊達に非ずや弱視守る
甘酒に男が酔うた振りをする
青田風「養護施設」の窓を開け放つ
生き生きと朝な夕なの青田風
遠山に一景を成す雲の峰

白夜の国へ

— 門伝 史会 —

北 欧 や 白 夜 の 空 に 月 浮 か ぶ

ヘルシンキ

元 老 院 広 場 聖 鐘 わ た る 花 ユ ツ カ

シベリウス公園

ポ プ ラ 綿 毛 柳 絮 の ご と く 舞 ひ 散 れ り

リ ラ の 花 少 女 が 道 に サ キ ソ フ オ ン

ヘルシンキよりストックホルムへ

白 夜 航 ム ー ミ ン 一 家 に 迎 え ら れ

豪 華 客 船 不 夜 城 と な る 白 夜 か な

巨 大 客 船 滑 る や 白 夜 の バ ル ト 海

ノーベル記念博物館

チ ヨ コ レ ー ト の メ ダ ル 買 ひ 込 む 夏 帽 子

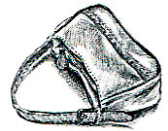
薔 薇 卓 に ノ ー ベ ル 賞 式 デ イ ナ ー か な

チボリ公園

寝 惜 し み て 歩 く 白 夜 の 青 き 空

山河集

同人作品



神蔵器選

鉾建や京七口の風入れて
右手よく働く日なり凌霄花
雲の峰保育園児をまる洗ひ
炎天に口をすぼめてをりにけり
冷し酒上席ひとつ空けておく

浅田 光代

高櫓のてつばう狭間^{ざま}や雲の峰
雲の峰湖に突き出る天主閣
夕蟬の坂や靴紐結ひ直す
大川の涼をとり込む角倉
月白や旅綴りゆく播但線
七夕の清涼殿のへそ饅頭
夏落葉一夫多妻の烏骨鶏
二人舞ふ巫女七夕の神遊び

西村 雪園

奥田 茶々

梶の葉の願ひは一つ幣くぐる
末席に掛けし教会晩夏かな
炎天に目の前を行く脹脛
室内に風の道あり涼気あり
砂浜に素足の足跡つけていく
サロベツの姫石楠の小さきかな
初めての梅漬けてみて母の恩

佐野つたえ

縄文の丘縄文の百合匂ふ
縄文の遺跡に生るる姫蚩
御城下の材木町や祭笛
山の蛾の壁に貼りつく夕まぐれ
薔薇の湯に己しづめてしまひけり

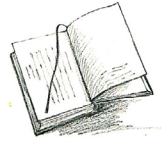
小林 共代

盆の月

中沢三省

微生物研究室の黴育つ
医を学びし素十・みづほや凌霄花
短夜の病廊長き担送車
地震の地より無事の証のさくらんぼ
竹皮を脱ぐタゴールの小径かな
誰が吹くや横笛庵の草の笛
三重の塔押し上ぐる若葉風
描かれぬカンバス白し著莪の花
あきつ飛ぶ島に二つの爆心地
人の世に近道ありや盆の月

風土独語／神蔵器



鉾建や京七口の風入れて

浅田 光代

京の七口は、秀吉が天下を制覇し、天正十九年、洛中を囲み洛外と区別するためにお土居を築造して以降のこととされている。栗田口は、洛中から三条橋を渡って、東海道・東山道への出口である。

東寺口は、洛中から西国街道への入口で、西大宮尻辺りにあったといわれるが、確かなことは解っていない。

丹波口は、桂川を渡り、老ノ坂峠を越えて丹波の国に行く丹波路の起点である。

長坂口は、鷹ヶ峰から長坂を経て杉坂に至る丹波街道の登り口付近である。

清蔵口の設置は、中世に遡るといわれているが、その位置は確認されていない。上京区下清蔵口町にあったといわれる。

鞍馬口は、北区鞍馬口町にあって、洛中から上賀茂を通り、市原・二瀬を経て鞍馬に至る鞍馬街道（丹波街道）の出口である。

大原口は、洛中から比叡登山や近江の国（近江路）や若狭の国（若狭路）への出口にあった。

鉾建は山鉾巡行の約一週間前、七月十日から十一日に行われる。私は鉾建は一度しか見ていない。毎年のものであるので前年の通

り設計図に従って組み合わせ、組み立てて行けばあまり困難とも思っていなかったが、実際に見たときそれは如何に大変なことであるかが解り驚き、また感動した。

鉾によって勿論異なるが、重量約七〜九トン、高さは地上から鉾頭まで約二十五メートル、車輪の大きさは直径二メートル前後であるという。

百貫の縄鉾組みで残りなし

広田 天涯

釘などは全く使われずゆるくなく、しかも固過ぎず巻き、古式にのっとって美しく雄蝶雌蝶に結ばれる。

十一日の午後、木組の最後の大仕事真木（しんぎ）が立つ。大綱を引き挺子の要領で真木を引き起し、左右のずれなどは四・五本のロープで正しながら鉾の中央の所定の位置に真直ぐに立てられる。

それぞれの鉾にはそれぞれの鉾頭。菊水の鉾には金色の菊花、菊の露を飲んで七百歳まで生き続けたという謡曲の「菊慈童」の故事より。月鉾は新月型（三日月）をつけ、真木のなかほど「天王座」に月読尊を祀っている。くじ取らずの長刀鉾は祇園祭の象徴、疫神を鎮め、疫病邪鬼を払いながら当日は巡行の先頭をつとめる。

あらためて見上げる今年の真木、威あって猛からず、一年間眠っていた真木がいま新しい生命を得ていきいきと輝き雲突く高さに聳え、赫熊と何十本とも知れぬ榊の束が供えられ、お榊の真白い幣が風にゆれている。京を取り巻く七口の風が早くも集まって来ているようだ。（以下略）

風土集



神蔵器選

農夫来て土用の畑に火を焚きぬ 津山 生田 作

刈草の乾く匂ひを束ねけり

影深む拝殿裏の蟻地獄

玉虫を観てをり鎌の手を休め

日盛りの虻の羽音を目で追ひぬ

月鉾の法被涼しき漢かな 福井 池田 光子

鉾組んで炎天に陰生まれけり

炎天に生き生き跳ねる鉾の縄

鉾立の路地よりカレー匂ひくる

プールより保母が園児を引き抜きぬ

炎天をくぐりて来たる入浴車 東京 林 いづみ

ひと部屋は西日が占めてをりにけり

藍浴衣仰臥の母に祖母のもの

風鈴の音の響きも夜の秋

夜の秋一朵の雲の遅れがち

いささかのこだはり重く明易し 岡山 高村 令子

老鷲や定刻に来る山のバス

よく笑ふ旅のみちづれ夏帽子

ガレージに兎のシヨベルカー梅雨湿り

八月や昭和は未だ焦げ臭し

みなづきの耳成山は田の中に 福生 雨宮 桂子

うたびとの語らひやまぬ雲の峰

夏掛のくるぶしに来る夜明けかな

城跡の中の学舎つばめの子

金魚田はシンクロナイズドスイミング

土用芽や今日始まりの眼鏡拭く 津山 生田恵美子

白桃を剥いて全し誕生日

塩振つて日日の指先茄子の紺

高階の夜景涼しき誕生日

明易しドア静かに子の出でゆく